



## 年間第 26 主日 (ルカ 16:19-31)

わたしが日頃遠ざけているものは何ですか

年間第 26 主日 C 年は「金持ちとラザロ」のたとえが取り上げられました。金持ちはもっとも遠ざけていた出来事を死後に問われました。わたしたちも、日頃何を遠くに追いやっているか問われているのだと思います。

火曜日は修道院のミサの日ですが、先週のミサ依頼は「敬老のお祝いを迎えた姉妹たちのため」でした。祭壇に上がって「本日のミサは敬老の祝いを迎えた姉妹のためです」と発表したのですが、わたしのメガネが合っていないのでしょうか。敬老者と思われるおばあさんは一人もいませんでした。明日にでもメガネ屋さんに行って、相談しようと思っています。

おばあさんつながりでもう一つ。秋分の日（木）に、信徒発見劇の上五島公演 DVD の上映会を行いました。まずまずの参加人数で皆さん喜んでもらえたのですが、一つ残念なことがありました。上映を終えての帰り、一人のおばあさんが玄関で困った様子でした。靴を間違えられて帰れなくなっていたのです。

残っていたのはサンダル一足だけでした。皆さんの中に必ずいるはずです。来るときにはサンダルを履いてきて、帰りはすま～して靴を履いて帰った人。困っている人がいます。解決できることを心から願っています。

福音朗読に戻りましょう。「金持ちとラザロ」のたとえ話です。金持ちは生きていくうちに自分の楽しみのためだけに時間とお金を使いましたが、神はそういう生き方のあげくに死んだ金持ちを拒みました。時間にもお金にも余裕があったのですから、時間もない、お金もない貧しい人々に手を差し伸べる必要があったのです。

そうは言っても、若いうちは自分の好きなことにしかお金をかけません。たとえば病院にお金を使うなんてもったいないと思っています。病院に千円払うくらいなら、焼き肉屋で上ロースを飛び越えて特上ロースを食べるほうがましだと思っています。

ところが自分の好きなことだけにお金をかけたツケは必ず返ってくるものです。わたしがそうでした。3年くらい前でしょうか。東京出張中に足の親指の付け根に今まで経験したことのない痛みが走りました。痛風でした。打ち身とか、切り傷の痛みではないのです。骨をボキッと折ったらこれくらい痛いだろうというような痛みでした。

ロキソニンという痛み止めを薬局で買って五島までは辛抱しまして、すぐ病院に飛び込みました。看護師さんが痛風を疑っています。診察した先生も驚いた様子もなく「立派な痛風です。尿酸値を下げる薬を処方しましょう。お大事に」ということでした。ここでようやく、健康のためにお金と時間を使う必要性に迫られたのです。病気の診断が下る前に考えるべきでした。

このように、人はしばしば、自分からいちばん遠い場所の痛みを分かろうとしないのです。わたしはそれまで病気らしい病気もしたことがなかったので、健康に注意するとか、健康のためにお金と時間を使うなどということは最も意識から遠い事柄だったのです。

たとえ話の金持ちにとっても、貧しいラザロの状態は自分から最も遠い生活でした。だれかの家の食卓から落ちる物で腹を満たすとか、ユダヤ人にとって不浄な生き物とされている「犬」が近寄ってきて、できものをなめている。こんなみじめな生活は、金持ちにとっては目の前で起こっていたとしてもいちばん縁遠い場所の出来事だったのです。

いちばん遠い場所で起こっていることを身近に感じない人は、いつまでたっても目の前の欲望に手を出します。ところがいったんいちばん遠い場所の痛みを知ると、お金の使い方、時間の使い方が変わり、社会全体が恩恵を受ける世の中に変わるのです。

「病気などまったく縁遠い」と思っていた人が痛みを知って初めて健康のためにお金と時間を使い、本当の豊かさをしみじみ感じる。たとえ話の金持ちも、いちばん遠い場所にいる貧しい人たちに富を分け与えて初めて、神の祝福を感じる豊かさにあずかれるのです。

イエスのたとえば地上の富にだけ注意を向けているのでしょうか。たとえ話は死後の世界にも及んでいます。そうであるなら、信仰と日常生活についても、目の前のことだけしか見ない生き方をせず、永遠の幸せにつながる生き方に気を配り、永遠の幸せにつながるはずのものを遠ざけたり追いやったりしていないか、考えさせるのです。

多くの人にとって、信仰は日常生活の中でいちばん遠ざけられている事柄かもしれません。一年に一度お墓参りをしてそれで終わりとか、年の初めに手を合わせて幸せを願うのが関の山だとか、そういう人も多かもしれません。わたしたちの中にも、クリスマスにかろうじてミサに来て終わりという人がいるのかもしれませんが。

信仰と、それを支える祈り。これらは慌ただしい生活のいちばん遠い場所に追いやられている部分かもしれません。しかしその場所の大切さを知るようになると、お金の使い方、時間の使い方に変化が生まれ、本当の幸せを追い求める人に変われるのです。わたしの祈りを必要としている人を身近に感じるができるようになり、諸聖人の交わりが理解できる人になります。神に何かをおささげすることに意味と価値を感じ、時間とお金を使える人に変わっていくのです。

いちばん遠くに追いやっているものにも気を配る人が、本当の幸せにたどり着ける人です。健康寿命もそうでしょう。カトリック信者としては、信仰に根差した生活を身近に考えてこそ、真の幸せを味わうのです。自分の視界に置きたくない事柄、目を背けている事柄をもう一度よく考えてみましょう。神はこれまでわたしが目を背けてきたことを重大な事柄として最後に問う可能性があるのです。